

## モザンビーク教育大学, 国立教育開発研究所における教育分野の JICA 技術協力プロジェクト視察〈モザンビーク〉の活動報告

Report on JICA Technical Cooperation Project in Education at Pedagogical  
University of Mozambique and National Institute for Education Development,  
INDE〈Mozambique〉

脇田祐輔  
Yusuke WAKITA

鳴門教育大学  
Naruto University of Education

### 1. 視察の目的

本視察の目的は次の二点であった。一点目は、JICA が実施する技術協力プロジェクトの現場視察を通して、国際協力、およびそこで働く日本人専門家の業務について学ぶこと、二点目は、小学校および中学校の教育現場の視察を通して、開発途上国の教育状況についての課題意識を持つことであった。

### 2. 活動の概要

上述の目的に沿い、主に2つの活動を実施した。1つ目は、JICA 技術教育プロジェクト「新しい学校教育制度に対応したカリキュラム普及プロジェクト」の算数の教科書開発現場に同行し、JICA 技術教育プロジェクトの現場を体験した。2つ目は、モザンビーク教育大学の教員及び教育開発国立研究所 (Instituto Nacional do Desenvolvimento da Educação: 以下 INDE) のカリキュラム開発担当者と共に、現地の小学校及び中学校を視察し、意見交換を行った。

### 3. 日程

- 8月3日 日本出国
- 8月4日 モザンビーク到着
- 8月5日 INDE
- 8月8日 INDE
- 8月9日 INDE, UNESECO 訪問
- 8月10日 INDE, モザンビーク教育大学訪問・ワークショップ
- 8月11日 INDE, マプト市内 A 小学校訪問

8月12日 モザンビーク出国

8月13日 日本到着

### 4. 活動報告

#### 4.1. モザンビーク教育大学でのワークショップ

モザンビーク教育大学で、約50名の学部生に対して日本型算数教育(測定領域)の特徴についての30分程度のワークショップを行った。英語で発表を行い、モザンビーク教育大学の先生にポルトガル語に通訳して頂いた。主な発表内容は、全ての授業において目標を明確にする重要性や、ただ暗記させるのではなく、グループワークや体験的活動を通して児童・生徒が主体的に学ぶことの大切さであった。また、「量的感覚」をいかに日常にあるものを使って養うかが鍵となることについても取りあげた。具体的には、ワークシートに、ものさしを使わずに感覚だけで、10cmを書いてももらったり、身の回りのもので1kgだと思えるものは



図1. モザンビーク教育大学の校舎。

何かを考えてもらった。最後に、あらかじめ用意しておいたビニールテープで作った1㎡の空間に何人の学生が入れるかという活動をモザンビークの学生と一緒にやった。発表終了後、モザンビーク教育大学の先生から、モザンビークではいかに算数を日常生活と関連付けられるかが重要な課題であり、今回の発表は非常に参考になったと言って頂いた。学生は、積極的に学び吸収しようという意志があり、とても協力的であった。



図2. 発表の様子。

捗状況をこまめに確認することが非常に重要なことであると感じた。JICA 技術協力プロジェクトでは、より良い教科書を開発するために、日本人専門家が、現地の担当者やカウンターパートと綿密に話し合いながら、豊富な教科知識やその背景を伝え、相手国側の人達と、双方が納得のいく最適解を見つけていく議論が行われていた。あくまでも主体は相手国側の人達であり、援助する側は相手国側の意見も尊重しながら一緒に良い方向に導くことが大切であると感じた。今後モザンビークの全ての子どもの届けられる新しい教科書の開発は、非常にやりがいと責任の伴う重大な仕事であると痛感した。



図4. 教科書開発現場の様子。



図3. 1㎡に何人入れるかの活動の様子。

#### 4.2. INDE でのプロジェクト視察

INDE では、モザンビークの算数教科書開発現場に同行し、主に Grade 3 の算数の教科書と指導書の校正を担当させて頂いた。担当者は教科書の細部にまでこだわり、一つ一つ議論を積み重ね、教科書開発を行っていた。プロジェクトのカウンターパートは、日本人専門家や JICA 職員の方々とオンラインで会議を行い、計画を練りながら進めていた。遠隔でプロジェクトを進めるためには、コミュニケーションを取りながら進

#### 4.3. 現地 A 小学校視察

モザンビーク教育大学の先生と共にマプト市内の小学校を訪問した。1つの教室に40～50人の様々な年齢の児童がいる教室を視察した。言葉は分からなかったが、子どもたちはとにかく元気で素直であることが表情から伝わってきた。言語はポルトガル語や現地語が使われていた。コミュニケーションを取るために、こちらが英語で one, two と話しかけると、three, four と続けて得意げに言ってくれる子どももいた。



図5. 現地小学校の様子。

## 5. 気づき・学び

本プログラムを通して、モザンビーク教育大学の学部生や、現地小学生との交流、自身の研究発表、国際教育協力の最前線の視察を行うことができ、非常に有意義な経験をすることができた。モザンビークでは、子どもの数が急増しており、教育の質の低下が課題である。質の高い教科書を全国の子どもたちに一斉に配布することで、教育の質が高まることが望まれる。子ども達の手に渡り、楽しそうに学ぶ姿を想像すると、その期待がしてやまない。約1週間の滞在の中で、立場は様々であるが、皆共通してモザンビークの教育をさらに良い方向に変えたいという強い心意気を持った方々に沢山出会うことができた。さらに、大人、子ども、性別に関わらず、モザンビーク人の大らかさやたくましさを感じた。町全体で支え合って生きていくことで、子ども達もその中で生きるための知恵を獲得しているようだった。ただ、町を歩いていると、児童労働が気に留まった。小学生くらいの子どもが兄弟姉妹で協力して何かを売って、生活費を稼ごうとする姿を何度も見て心が苦しくなった。今日明日を生きるためとはいえ、その子どもの健康、安全、将来を考えると、できる限り児童労働をせず、学びたいことを学ぶ時間に充ててほしい。実際に、国際労働機関とユニセフによる報告書『Child Labour: Global estimates 2020, trends and the road forward』(ILO&UNICEF, 2021)は、COVID-19による経済的ショックと学校の閉鎖の影響で、さらに多くの子どもたちが最悪の形態の児童

労働に追い込まれる可能性があることを指摘している。さらに、2022年末までに世界で900万人の子どもがさらに児童労働に追い込まれる危険性があると警告している。これは、モザンビークだけに限らず、世界全体の喫緊の課題として捉え、向き合っていきたい。

本プログラムで実際にモザンビークに足を運び、自分の目で見ることで、国際協力に更なる興味・関心を持つことが出来た。教育分野もしくは教育、国際協力の分野に進むにあたっての仕事面・生活面を具体的にイメージすることが出来た貴重な経験となった。今後この経験を生かしながら、自身の勉学やキャリアの形成に役立てていきたい。

## 謝辞

本プログラムの実施にあたり、モザンビーク教育大学、INDE、鳴門教育大学国際交流係、JICA、株式会社コーエイリサーチ & コンサルティング、指導教員の日下智志先生をはじめ関係者各位に心より感謝申し上げます。

## 参考文献

ILO&UNICEF. (2021). *Child Labour: global estimates 2020, trends and the road forward*.  
Website. [https://www.ilo.org/ipec/Informationresources/WCMS\\_797515/lang-en/index.htm](https://www.ilo.org/ipec/Informationresources/WCMS_797515/lang-en/index.htm)